

砂川樋門コース

ふるさとガイドおおぶ



延命寺NO1



客殿



文殊楼門

御本尊 延命地蔵菩薩 天台宗 山号宝龍山である。

蜜蔵院（春日井市熊野町）の末寺。当寺に所蔵する「由緒取調」などによれば、盛祐上人（じょうゆうしょうにん）により鎌倉時代に開創されたようであるが、その草創年次は不詳である。

室町初期には、藤井神社の別当寺として栄え、七堂伽藍（しちどうがらん）をはじめ山内に塔頭（たちちゆう）を擁していた。中期以後には衰退した。しかし、享祿四年（1531）比叡山より慶済が晋住して中興開山となり、昔日のごとく復興した。

天文二年（1533）七月には、後奈良天皇より「寶龍山」の勅額を賜った。二世仙慶も比叡山より来錫し、三世真慶は緒川城主水野家より出家した人であった。

「文殊楼門」

天保年間に再建された文殊楼門は、熱田の宮大工喜兵衛の手によるもので、楼上には文殊菩薩が安置されている。

延命寺NO2



刺繍普賢菩薩像

「寺宝」

刺繍普賢菩薩像（室町時代）	県指定文化財
文殊楼門（江戸時代）	市指定文化財
墨書大般若経（南北朝～室町時代）	同
勅額（室町時代）	同
造阿弥陀如来坐像一軀（南北朝時代）	同
その他多数有り。	

客殿屋根に水野家家紋、金箔の家紋がある。

神明社



本殿(神明造)



狛犬

祭神は、天照皇大神

境内社 秋葉社・弁財天社

創建 宝永4年(1707)正月28日(広恵新田字屋敷前に創建)

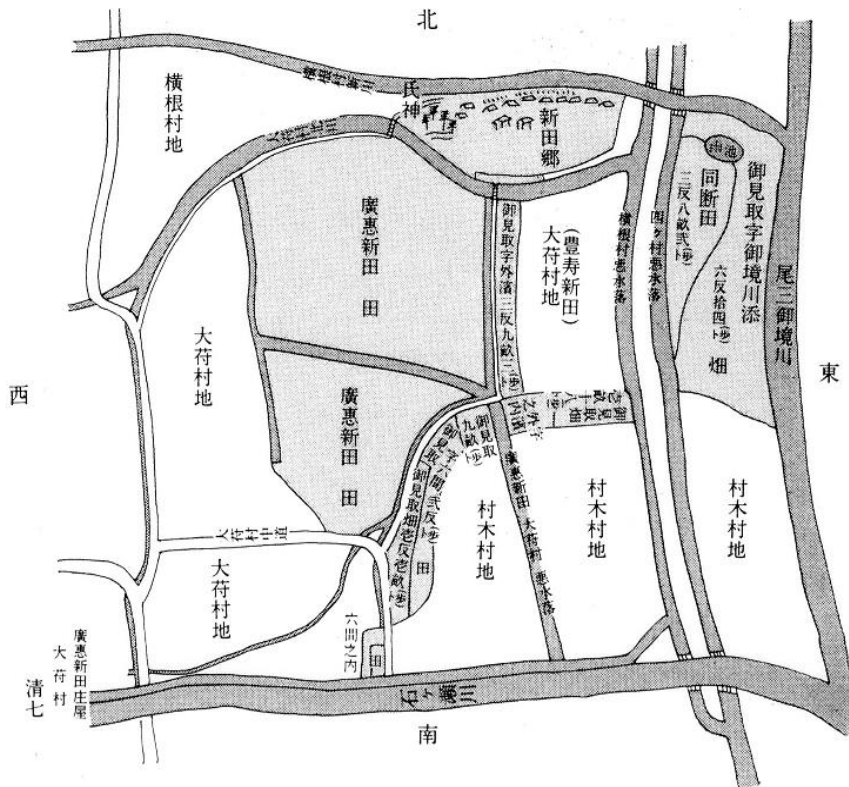
大府町史に「広恵新田に宝永4年尾張藩の直新田としてお縄入れがあり」とあり、同時期に創建をみたことは、広恵新田(通称浜田)の開墾の初護神として創祀されたものであろう。低地のためにしばしば水害にあい、文政12年(1829)8月に現在地へ奉遷された。

「知多郡史」に氏子戸数16戸とあり、明治9年1月大府村に合併する以前の広恵新田は、おそらく10戸前後の小村であったあろう。その氏神である神明社は、明治4年村社に列せられた。

社宝の陶製狛犬(文政12年奉納)1対は、干ばつが続いたとき、延命寺川(屋敷前境内)に沈めて雨乞いをすると霊験あらたかで必ず雨に恵まれたという。片方の狛犬は頭部を牛なっている。

昭和52年に全面的な社殿造営が行われ、本殿(神明造)を中央に右に秋葉社(祭神迦具土神)、左に弁財天社(祭神巖島神)があり、ともに瓦葺覆殿に覆われている。

廣恵新田



廣恵新田は、宝永4年(1707)、尾張藩の直新田として検地が済み、公的には玄新田と呼び、高さ154石5斗8合に決定した。

当時は大府村に属していて、通称濱田と呼ばれ、低地のため水害が多く、いつしか蒲野原(がものほら)になった。

大島信次郎によって書かれた「明治21年記録」によると、廣江新田の成立の事情は次のようにまとめられる。天明年間(1781~1789)、尾張藩の御用達をしていた鍵屋(名古屋)傳兵衛(でんへいえい)が払い下げを受けた。そのころ、北島の山崎又八という人が、大府村の庄屋鷹羽藤兵衛と相図り、傳兵衛に蒲野原になっていたところの開墾を申し込み、堤防工事と水路を造った。しかし、それまでの工事で蒲野原のままになっていたのを、また、尾張藩が買い戻した。天保7年、山口徳右衛門(愛知郡大江村)が開墾工事を請け負い、寺島太吉(愛知郡笠寺村)を呼び寄せて工事に着手した。同8年(1837)、両人は廣江新田の北川沿いに移住し開墾を続けた。このころ、横根村の砂原に移住した助蔵・後藤伊三郎は、砂原を開墾した。のちに北川沿いに移住した。やがて磯部竹三郎・加藤周平・青山政右衛門・加藤房三郎外四、五名の人たちも移住してきて廣恵新田の集落ができ開墾もなったという。

廣恵新田は、大府村を親村として、大府村の「後見庄屋」があった。村立の時期は、判然としないが、文政9年(1826)ともいわれるから、前記で見ると、名古屋の伝兵衛が所有していたころにあたる。豊寿新田(外濱田)は幕末まで大府村に属していて、検地はされなかった。玄新田(廣恵新田)の定免は検地後、1割1分であった『尾張徇行記』によれば「今不同免」とある。

砂川樋門



砂川樋門説明看板



砂川樋門

江戸時代の樋門はすべて木製だったので、災害等により度々破損し、川の管理維持は、村々の立場を含めて複雑となり、以後、水との闘いの歴史を物語っている。村人への改修の負担が大変なものであった。

樋門は明治 24 年（1891）の濃尾地震で樋門が破壊されたので、明治 26 年に修復完成した。その後明治 29 年の大洪水で破損、翌年（同 30）に補修した。明治 30 年に大工事に着手し、翌年（同 30）7 月に完成した。

明治 30 年（1897）の大工事は、服部長七が考案した人造石工法により改修工事が行われた。「長七たたき」と呼ばれ、日本の治水工事に大きな貢献をなした。

「長七たたき」とは消石灰と真砂（サバ土）とを混ぜて、水で練ってたたき固めたもので、水中での凝固を可能にし、コンクリート工法が普及するまで広く使用された。砂川樋門は、驚くべきことに竣工から 120 年以上経過した現在も堅牢な姿を留めている。県下に残る人造石工法の樋門では最初期のもので、市域に残る貴重な近代化遺産の一つである。なを、樋門の上部は砂川川が流れ、天端幅約 4 m、高さ 2.6 m である。

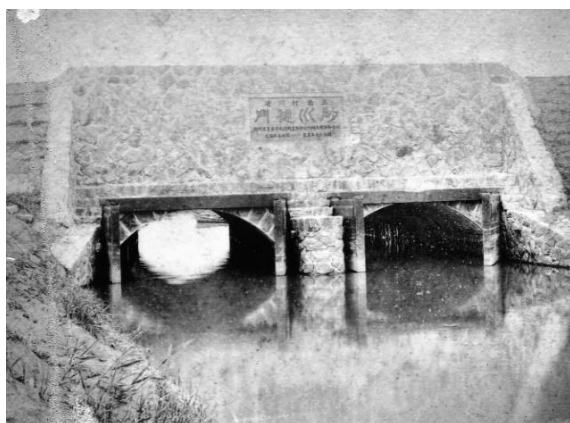
五ヶ村川



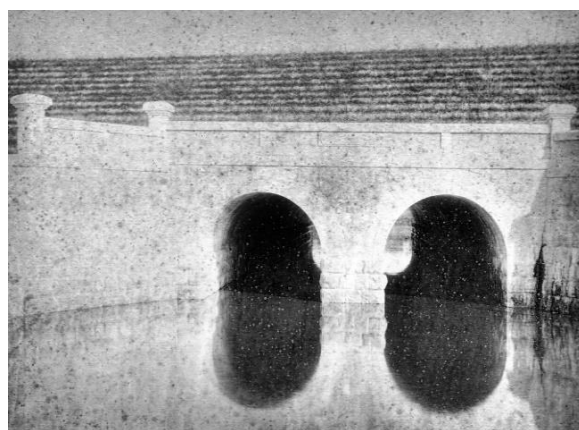
皆瀬樋門工事(長七たたき)



石ヶ瀬樋門工事(長七たたき)



砂川樋門(長七たたき)



皆瀬樋門(長七たたき)

上流を豊明市に発し、大府市から知多郡東浦町を通り海に入る排水路である。五ヶ村川の流域一帯はかつて入江であったが、新田開発に伴い尾張・三河の両方から干拓工事がなされて境川の堤が築かれ、悪水は自然に境川に流れ込んでいた。延宝五年（1677）境川の川底は上流から流された土砂のために高くなり、雨降りには稲が水につかるようになった。北尾・近崎・大脇(現豊明市)の諸村は、横根村地内に新しい川を境川に沿って開削し悪水を海へ流すことにした。それに伴い境川に流れ落ちる大坪（今はない）・皆瀬・明神・砂川の諸河川の下に樋門を築いた難工事であった。

川流域には、当初七か所の樋門があり、現在では5ヶ所（正戸・皆瀬・明神・砂川・石ヶ瀬）となっている。

江戸時代の樋門はすべて木製だったので、災害等により度々破損し、川の管理維持は、村々の立場を含めて複雑となり、以後、水との闘いが続き、村人への改修の負担が大変なものになった。

正戸・皆瀬・明神・砂川・石ヶ瀬の5ヶ所の樋門は、明治24年（1891）の濃尾地震ですべての樋門が破壊されたが修復完成しました。その後明治29年の大洪水で皆瀬・明神・砂川・石ヶ瀬の樋門は破損した、砂川・石ヶ瀬の樋門は翌年（同30）に補修した。明治30年3月に大工事に着手し、同年7月に完成した。明神樋門は明治34年、皆瀬樋門は明治35年に完成した。